

- R, Yoshida K, Toyokuni S, Ishiguro F, Osada H, Sekido Y, Yokoi K, Usami N, Shames DS, Kondo M, Gazdar AF, Minna JD, Hasegawa Y: The circadian clock gene BMAL1 is a novel therapeutic target for malignant mesothelioma. *Int J Cancer*, 131:2820-31. 2012.
6. Fujii M, Nakanishi H, Toyoda T, Tanaka I, Kondo Y, Osada H, Sekido Y: Convergent signaling in the regulation of the connective tissue growth factor in malignant mesothelioma: TGF-beta signaling and defects in the Hippo signaling cascade. *Cell Cycle*, 11: 3373-3379, 2012.
2. 学会発表
1. Fujii M, Toyoda T, Nakanishi H, Yatabe Y, Sato A, Hida T, Tsujimura T, Osada H, Sekido Y: TGF-beta synergizes with defects in the Hippo pathway by inducing CTGF expression. AACR Annual Meeting 2012 (Chicago, USA) (ポスター)
  2. Sekido Y, Tanaka I, Osada H, Fujii M: Hippo signaling pathway inactivation in malignant mesothelioma cells. iMig (international Mesothelioma interest group) 2012 (Boston, USA) (口演)
  3. Sekido Y: Molecular Abnormalities and Cell Signaling Dysregulation of Malignant Pleural Mesothelioma. The 17th Congress of the Asian Pacific Society of Respiriology (香港、中国) (シンポジウム)
  4. 藤井万紀子、豊田武士、中西速夫、近藤豊、長田啓隆、関戸好孝: 悪性中皮腫におけるHippoシグナリングの欠失とTGF- $\beta$ の協調によるCTGFの発現調節。第71回日本癌学会学術総会 (札幌) (ポスター)
  5. 関戸好孝: Carcinogenesis induced by asbestos exposure and genetic abnormalities in mesothelioma cells. 第50回日本癌治療学会学術総会 (横浜) (シンポジウム)
  6. 関戸好孝: 悪性中皮腫におけるHippoシグナリング伝達系異常と遺伝子発現. Japan Mesothelioma Interest Group (JMIG) 2012. (京都) (口演)
- G. 知的財産権の出願・登録状況  
なし。

厚生労働科学研究費補助金（第3次対がん総合戦略研究事業）  
分担研究報告書

正常中皮細胞株の樹立と新規分子標的薬の効果の検討

研究分担者 中西速夫 愛知県がんセンター研究所 腫瘍病理学部 室長

研究要旨：悪性中皮腫は悪性度が高く、しかも現在、効果的な抗がん剤や有効な分子標的薬が存在しないため、予後は極めて不良である。中皮腫には種々の組織型（上皮型、2相型、肉腫型）が存在し、肉腫型ほど悪性度が高い。しかし、この組織多様性の背景に存在すると考えられる中皮細胞の分化や上皮間葉移行（EMT）などの制御メカニズムは殆ど明らかになっていない。この点を明らかにするためには不死化した正常中皮細胞株が有用であるが、既存の中皮細胞株は繊維芽細胞様の形態を示し、また中皮細胞マーカー発現も比較的乏しく、正常中皮細胞のモデルとしては満足すべきものではない。本研究では初代中皮細胞に HPV-E6, E7 および hTERT 遺伝子をレトロウイルスベクターを用いて導入し、敷石状に増殖する上皮性の株から繊維芽細胞様の形態を示す株まで上皮型、2相型、肉腫型を mimic する種々の不死化中皮細胞株（パネル）を作成した。これら独自に樹立した細胞株を用いて分化や Hippo シグナル経路を解析し、以下の諸点を明らかにした。1) Calretinin, Podoplanin, Mesothelin などの中皮細胞マーカーを中等度から高度に発現し、かつ Merlin など Hippo 経路の発現亢進、その下流の YAP の抑制、細胞質局在など正常中皮細胞の形質を維持していること、2) 少数の染色体異常は認めるものの、ヌードマウスでは造腫瘍性を認めないこと、3) 不死化細胞の YAP 強制発現株は胸腔内移植により上皮型、2相型、肉腫型を mimic した腫瘍を形成すること、等から本株が正常中皮細胞および悪性中皮腫のすぐれた実験モデルとなることを明らかにした。さらに、Lentivirus ベクターを用いて Luciferase 遺伝子を導入した中皮腫細胞株を複数株樹立した。この細胞をヌードマウスの胸腔内に接種し、形成された胸膜播種を生きのまま体外から経時的に発光イメージングでき、前臨床試験に有用な悪性中皮腫の胸腔播種モデルを確立した。

- |   |                          |
|---|--------------------------|
| A. 研究目的   | 播種発光イメージングモデルの作成         |
| 1. 種々の分化形質を示す不死化正常中皮細胞株の樹立とその増殖、シグナル経路の <i>in vitro</i> 解析および YAP 強制発現株を用いた <i>in vivo</i> 解析 | B. 研究方法                  |
| 2. 前臨床試験に有用な悪性中皮腫の胸腔  | 1. 不死化正常中皮細胞株の樹立とその特性の解析 |

胃がん患者の切除大網組織および腹水より中皮細胞の初代培養を行い、敷石状に増殖する上皮様コロニーを分離してこれに HPV-E6, E7 および hTERT 遺伝子をレトロウイルスベクターを用いて導入し、不死化中皮細胞株を作成した。さらにリングクローニング法により敷石状に増殖する上皮型から繊維芽細胞様に増殖する肉腫型まで、細胞形態の異なる亜株を複数分離した。次にこれらの細胞株を用いて染色体の核型解析やヌードマウスにおける造腫瘍性を検討した。また蛍光染色, 定量 RT-PCR 法や Western blot 法等をもちいて Rb 経路や Hippo シグナル伝達経路の解析を行った。一方、in vivo における腫瘍組織形成能を見るためレトロウイルスベクター MIG-YAP を用いて YAP を強制発現させた株も作成した（瀬戸との共同研究、瀬戸の項目参照）。

## 2. 発光イメージングの可能な悪性中皮腫の胸腔播種モデルの作成

悪性中皮腫細胞株 H290 細胞等にレトロウイルスベクター CSII-luc を用いてルシフェラーゼ遺伝子を導入し、薬剤選択により安定細胞株をえた。この H290-Luc 細胞を胸腔内に接種し、経時的にルシフェリンを腹腔内に投与し、胸腔内の腫瘍増殖や胸腔内進展を IVIS Lumina II を用いて in vivo イメージングを行った。また一定期間後、マウスを屠殺解剖し、胸腔を開いた状態で胸腔内の播種性進展を定量的に検討した。

## C. 研究結果

### 1. 不死化正常中皮細胞株の樹立とその特性の解析

リングクローニング法により細胞形態が異なり、悪性中皮腫の上皮型、2相型、肉腫型をミミックする3種類の不死化中皮細胞株を作成した（上皮型：HOMC-2 A-7 (B-1)、2相型：HOMC-2 A-7 (D-4)、肉腫型：HOMC-3

A-4）（図1）。

HPV-E6, E7, hTERT および P16 等の発現を RT-PCR 法で調べ、HOMC-2 A-7 (B-1) (以下 B-1)、HOMC-2 A-7 (D-4) (以下 D-4)、HOMC-3 A-4 細胞 (以下 A-4) のみで高発現していることを確認した、また不死化細胞は中皮腫細胞と異なり初代培養細胞と同様に P16 を高発現しており、Rb のリン酸化は阻止されるが、E7 が直接 Rb に結合することにより、Rb 経路を不活化し S 期移行を促進していることを Western blot により確認した。染色体分析では数は Mode が 45、Karyotype では 22 番、その他の染色体に少数の異常を認めたが、ヌードマウスにおける造腫瘍性は皮下移植、胸

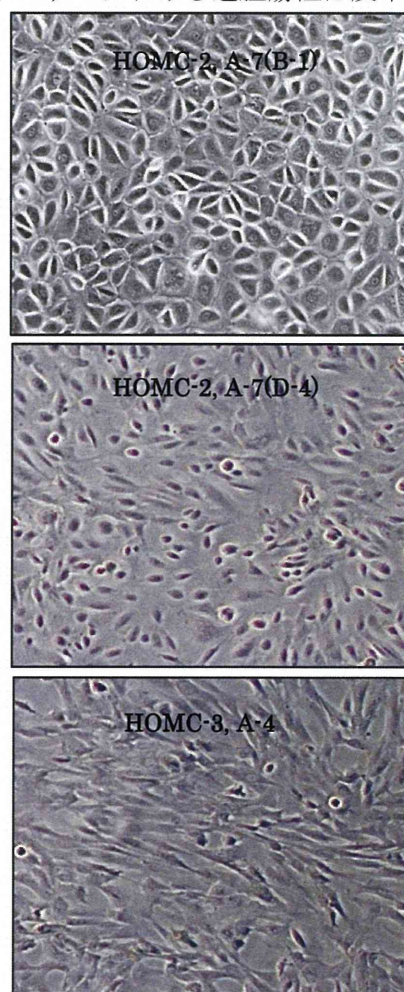


図1 種々の形態を示す不死化中皮細胞株

腔内移植ともに認めなかった。ちなみに陽性対照とした悪性中皮細胞株では皮下移植こそ造腫瘍性は低率であったが、胸腔内移植では高率に腫瘍生着が認められた。次に各種中皮細胞マーカー遺伝子発現を RT-PCR で解析したところ、不死化 B-1 細胞株は上皮マーカー (E cadherin) を初代培養細胞と同様に高発現していたが、D-4 細胞の E cadherin 発現は低く、A-4 細胞では発現を殆ど認めなかった。一方、Merlin (NF2) は不死化細胞では悪性中皮腫細胞と異なり初代培養細胞と同様に高発現しており、そのタンパク局在も悪性中皮腫細胞が核であるのに対し、不死化中皮細胞では細胞質により多く局在していた (図 2)。

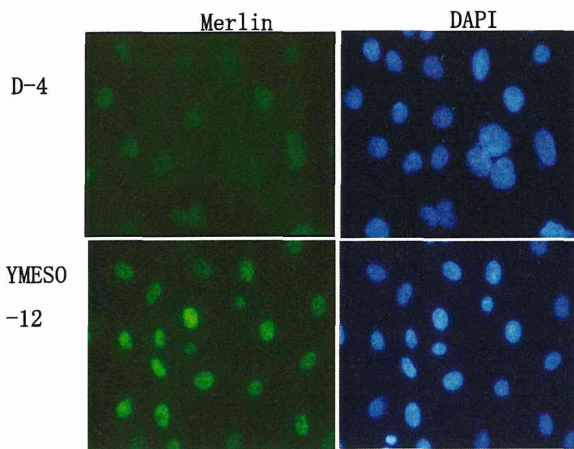


図 2 不死化中皮細胞と悪性中皮腫細胞における Merlin の局在

さらに 3 種類の不死化細胞株に Hippo 経路の下流で増殖や抗アポトーシスを促進する TEAD の Transcriptional coactivator である YAP をレトロウイルスベクター MIG-YAP を用いて強制発現させたところ、3 種類ともヌードマウスに対する造腫瘍性を獲得し、しかも興味深いことに in vitro で上皮形質を示す B-1 細胞の YAP 発現株は胸腔に同所移植するとやはり上皮型の形態をとり胸膜に沿って乳頭状に進展すること、また in vitro

で 2 相型を示す D-4 細胞の YAP 発現株も同様に胸膜播種を起こすが、組織型は 2 相型に近いこと、さらに in vitro で肉腫型を示す A-4 細胞は胸腔内でも結節状の肉腫様腫瘍を形成し、筋肉や骨への高い浸潤性を有することが判明した (図 3)。

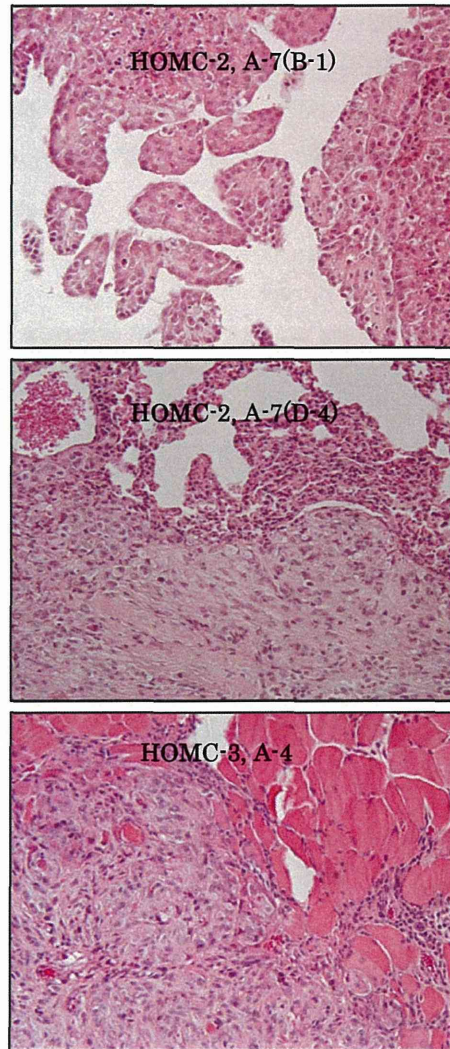


図 3 不死化中皮細胞の YAP 強制発現株の胸腔内移植腫瘍の組織像

## 2. 発光イメージングの可能な悪性中皮腫の胸腔播種モデルの作成

H290-Luc 細胞を胸腔内に接種し、経時的にルシフェリンを腹腔内に投与し、胸腔内の腫瘍増殖や胸腔内進展を IVIS Lumina II を用いて in vivo イメージングを行った。胸腔

は肋骨など硬組織に被われているため、蛍光イメージングでは体外からのイメージングは不可能であるのに対し、発光イメージングでは胸腔接種後 1 日目から数週間まで体外からの経時的な胸腔内腫瘍の非侵襲的モニタリングが可能であった (図 4)。一定期間後、マウスを屠殺解剖し、体外イメージングと胸腔を開いた状態での胸腔内の播種性進展を比較検討したところ、体外イメージングの定量性は必ずしも高くなかったが、胸腔内進展や治療効果のモニタリングは十分可能であることが判明した。

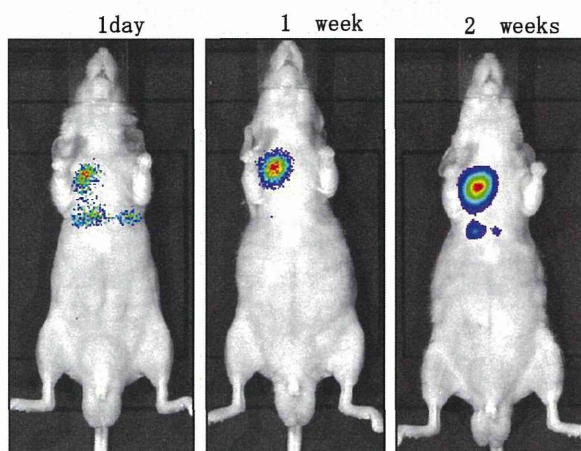


図 4 悪性中皮腫細胞 H290, CSII-luc による胸腔播種性進展の in vivo 発光イメージング

#### D. 考察

今回樹立した 3 種類の不死化中皮細胞は in vitro, in vivo においてそれぞれ以下のユニークな特徴を示した。1) B-1 株は in vitro において敷石状の上皮様増殖パターンを示し E-cadherin を高発現するが、Vimentin, Snail, CTGF の発現が低いこと、また YAP 強制発現株をヌードマウス胸腔内に移植すると乳頭状パターンで増殖する上皮型腫瘍を形成することから最も上皮性性格の強い細胞株であり、しかも Podoplanin,

Calretinin, Mesothelin, WT-1 などの中皮細胞マーカーも高発現すること。2) D-4 株は in vitro で B-1 株ほどきれいな敷石状の上皮様増殖パターンを示さず、E-cadherin の発現も B-1 株に比べ低く、逆に Vimentin, Snail, CTGF の発現は高いこと、YAP 強制発現株の胸腔内移植では一部で肉腫様の組織型を認めることから、2 相型をミミックしていること、しかし Podoplanin, Calretinin, Mesothelin, WT-1 などの中皮細胞マーカーの発現は B-1 株と比べて遜色ないこと。一方、3) A-4 株は in vitro で繊維芽細胞様形態を示し、E-cadherin の発現は殆どなく、逆に Vimentin, Snail, CTGF の発現が高く、また YAP 強制発現株の胸腔内移植では肉腫様腫瘍を形成することから、上皮性性格を欠損した肉腫様の細胞株であり、中皮細胞マーカーの発現は WT-1 を除いて殆ど認めなかった。ただし、この A-4 株については繊維芽細胞を不死化した可能性も完全には否定できず、今後さらなる検討が必要と考えられた。

以上のことより、今回樹立した不死化中皮細胞株 B-1, A-4 およびそれらの YAP 発現株は悪性中皮腫の上皮型、肉腫型を、また D-4 株は中間 (2 相) 型をミミックしており、肉腫型に近い従来の SV40LT 導入による不死化中皮細胞 (MeT-5A) に比べて、中皮細胞の増殖、分化、シグナル伝達等の解析により有用なモデルと考えられた。また本モデルは悪性中皮腫における上皮型、肉腫型、中間型に見られる中皮腫の組織学的多様性や EMT のメカニズム解明に最適の実験モデルと考えられる。今後、これらの細胞株にルシフェラーゼ遺伝子を導入した細胞株を作成すれば発光による高感度な in vivo イメージングも可能となり、中皮腫の各組織型に対する新しい治療法の開発に極めて有用と考えられる。

#### E. 結論

中皮腫には3種類の組織型(上皮型, 2相型, 肉腫型)が存在するが、この組織多様性を備えながら、しかも単一患者に由来し、従って遺伝的背景の均一な正常不死化細胞株およびそのYAP発現株を作成し、中皮細胞の分化や上皮間葉移行(EMT)などの制御メカニズムの解析に最適な実験モデルを世界に先駆け開発した。またルシフェラーゼ発光による高感度な胸腔播種のin vivoイメージングが可能な、前臨床試験に有用な悪性中皮腫の胸腔播種モデルを確立した。

今後、これらのモデルを組み合わせることで、中皮腫の組織多様性やEMTのメカニズム解明、また中皮腫の各組織型に対する新しい治療法の開発に繋げるべくモデルをさらに発展させてゆく予定である。

## F. 研究発表

### 1. 論文発表

1. Ohta M, Abe A, Ohno F, Hasegawa Y, Tanaka H, Maseki S, Kondo E, Kurita K, Nakanishi H. Positive and negative regulation of podoplanin expression by TGF- $\beta$  and histone deacetylase inhibitors in oral and pharyngeal squamous cell carcinoma cell lines. *Oral Oncol*, 49:20-6, 2013.
2. Murakami H, Nakanishi H, Tanaka H, Ito S, Misawa K, Ito Y, Ikehara Y, Kondo E, and Kodera Y. Establishment and characterization of novel gastric signet-ring cell and non signet-ring cell, poorly-differentiated adenocarcinoma cell lines with low and high malignant potential. *Gastric Cancer*, 16:74-83, 2013.
3. Fujii M, Nakanishi H, Toyoda T, Tanaka I, Kondo Y, Osada H, Sekido Y. Convergent signaling in the regulation of connective tissue growth factor in malignant mesothelioma: TGF $\beta$  signaling and defects in the Hippo signaling cascade. *Cell Cycle*, 11:3373-9, 2012.
4. Fujii M, Toyoda T, Nakanishi H, Yatabe Y, Sato A, Matsudaira Y, Ito H, Murakami H, Kondo Y, Kondo E, Hida T, Tsujimura T, Osada H, Sekido Y. TGF- $\beta$  synergizes with defects in the Hippo pathway to stimulate human malignant mesothelioma growth. *J Exp Med*, 209; 479-94, 2012.
5. Akita K, Yoshida S, Ikehara Y, Shirakawa S, Toda M, Inoue M, Kitawaki J, Nakanishi H, Narimatsu H, Nakada H. Different levels of Sialyl-Tn Antigen expressed on MUC16 in Patients With Endometriosis and Ovarian Cancer. *Int J Gynecol Cancer*, 22:531-8, 2012.
6. Maseki S, Ijichi K, Tanaka H, Fujii M, Hasegawa Y, Ogawa T, Murakami S, Kondo E, Nakanishi H. Acquisition of EMT phenotype in the gefitinib-resistant cells of a head and neck squamous cell carcinoma cell line through Akt/GSK-3 $\beta$ /snail signaling pathway. *Br J cancer*, 106:1196-204, 2012.
7. Ozaki H, Matsuzaki H, Ando H, Kaji H, Nakanishi H, Ikehara Y, Narimatsu H. Enhancement of metastatic ability by ectopic expression of ST6GalNAcI on a gastric cancer cell line in a mouse model. *Clin Exp Metastasis*, 29:229-38, 2012.
8. Nakanishi H, Ito S, Matsui M, Ito Y, Misawa K, Kodera Y. Noninvasive and real-time fluorescence imaging of peritoneal metastasis in nude mice.

Methods Mol Biol, 872 : 85-95, 2012.

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 発明名称：微粒子分離用マイクロ流路チップ、該チップを用いた微粒子分離用システム及び微粒子分離方法 特許出願番号：特願 2012-227717 発明者：新井 史人、益田 泰輔、新美 京（名古屋大学）：中西速夫、伊藤 誠二（愛知県がんセンター） 出願日；平成 24 年 10 月 15 日
2. 発明名称：腹腔鏡手術時に胃の外側から腫瘍の位置を同定する方法特許出願番号：特願 2012-28667 出願人：愛知県、学校法人梅村学園、国立大学法人名古屋大学 発明者：三澤 一成、中西速夫（愛知県がんセンター）：長谷川 純一、木村翔太（中京大学）：澁 真悟、森 健策（名古屋大学） 出願日：平成 24 年 2 月 13 日

厚生労働科学研究費補助金（第3次対がん総合戦略研究事業）  
分担研究報告書

悪性中皮腫の細胞周期・細胞極性の異常の解析と阻害薬の検討

研究分担者 稲垣昌樹 愛知県がんセンター研究所 発がん制御研究部 部長

研究要旨： 中皮腫細胞の増殖抑制を目指す目的で、新たな細胞増殖・分化制御の仕組みを明らかにし、その阻害あるいは誘導による効果を検討してきた。なかでも一次線毛形成と細胞周期進行が共に中心体を核としつつも逆相関して起こることは長年分子機構が不明であったが、分担者らの報告はその仕組みを示し、全く新しい細胞増殖・分化制御機構を提示した。すなわち、正常二倍体細胞では一次線毛形成の誘導がトリコプレイン蛋白質あるいはオーロラ A 分裂期キナーゼの機能抑制（RNA 干渉法）により起こることを見出した。しかもこの線毛は細胞増殖休止も導いた。これをがん細胞に応用したところ、がん細胞でのオーロラ A の機能抑制は一次線毛形成を誘導せず、むしろ分裂障害によりがん特異的な傷害を導くことを見出した。このオーロラ A 抑制による効果の差は、多くのがん細胞には一次線毛形成能が無いという細胞特性の差に注目して証明されたものであり、合理的ながん細胞特異的傷害の仕組みの新発見といえる。また、中心体情報を元に選出した遺伝子のノックダウンスクリーニングにより、同様の蛋白質、すなわち増殖条件下でも一次線毛形成と細胞周期休止を導く蛋白質を新たに10個ほど見出した。同時に、この結果を追試するための正常中皮のモデル細胞として、hTERT で不死化した正常中皮細胞 LP9/TERT-1 に一次線毛形成能があり、この実験目的に適することを確認した。今後これを対照に、このがん細胞特異的傷害作用の中皮腫細胞での有効性を検討する。同時に複数見出した正常細胞で類似の作用を示す蛋白質についても解析を進める。

A. 研究目的

分担者らは中皮腫細胞の増殖抑制を目指す目的で、新たな細胞増殖・分化制御の仕組みを明らかにし、その阻害あるいは誘導による効果を検討してきた。特に、長年分子機構が不明であった正常二倍体細胞における一次線毛形成と細胞周期進行の逆相関に注目してきた。この逆相関は、共に中心

体を核とする現象ではあるが、一次線毛が細胞膜上に形成されるのに対し、細胞周期進行が細胞内での紡錘体形成を必要とする要求性の差から生じる。分担者らは、トリコプレイン蛋白質およびオーロラ A 分裂期キナーゼの中心体局在がこの逆相関のスイッチとなる可能性を見出したため、詳細な解析による証明とそのがん細胞傷害への応



用を試みた。また正常中皮のモデルとなる細胞を一次線毛形成能に注目して検索した。

## B. 研究方法

基本的な細胞生物学の手法を用いたが、特記事項を以下に記した。

### 1. 中心体での蛋白質局在解析

それぞれに特異的な抗体を作成し、マーカー分子と共に組織染色、細胞染色を行いその局在を高解像度顕微鏡（デルタビジョン）により確認した。また、分画を調整しそのイムノブロットを行うことで生化学的にも局在を検討した。一次線毛形成は血清飢餓により誘導した。

### 2. 分子間結合実験

イーストハイブリッド法、免疫沈降法、リコンビナント精製蛋白質による *in vitro* 結合実験を適宜行った。

### 3. オーロラ A キナーゼアッセイ

HeLa 細胞を用い、トリコプレインとオーロラ A の共発現によるオーロラ A リン酸化 (pT288) の変化を検討した。また *in vitro* のキナーゼ活性変化はトリコプレインとオーロラ-A のリコンビナント精製蛋白質を混合し、ヒストン H3 を基質にすることで検討した。

### 4. トリコプレイン・オーロラ A の中心体機能の解析

RNA 干渉法による機能抑制実験、すなわちノックダウンを RPE1 細胞 (hTERT 不死化網膜色素上皮細胞、正常二倍体) あるいは HeLa 細胞 (子宮頸癌細胞) に対して行い、その発現を減弱させた。その状態において免疫染色により解析必要な分子の検討をした。トリコプレイン機能欠失による一次線毛形成については主に RPE1 細胞で検討し

た。表現型の確認のためには適宜遺伝子を再導入しレスキューを試みた。

## 5. 細胞周期制御機構の検討

RPE1 細胞では一次線毛形成と細胞周期休止は同時に起こることが知られている。そこで一次線毛の細胞周期への直接影響の有無をみるために、一次線毛を生じない系を IFT20 蛋白質のノックダウンにより追加確立した。これにトリコプレインあるいはオーロラ A の siRNA を組み合わせ、各種細胞周期マーカーの変化を検討した。同様の実験を HeLa 細胞でも行った。

## 6. トリコプレイン変異体解析

分子内ドメイン解析のため、トリコプレインの断片を蛋白質および発現ベクターとして作製し、上述の実験系で適宜使用した。

(倫理面への配慮)

遺伝子組み換え実験に関しては愛知県がんセンター遺伝子組み換え実験等安全委員会の承認を得て行った。

## C. 研究結果

### 1. 一次線毛形成と細胞周期進行が逆相関する仕組みの解析と応用

#### 1-1 トリコプレイン・オーロラ A キナーゼによる一次線毛形成抑制機能

一次線毛形成との関連については以下のような結果を得た。血清飢餓による増殖停止で一次線毛が形成されると RPE1 細胞ではトリコプレインの母中心小体での局在が減弱した。同状態でトリコプレインを強制発現すると、一次線毛形成が抑えられた。そこで増殖状態でトリコプレインノックダウンを行ったところ、一次線毛形成が見られた。同時に細胞周期の休止を認めた。こ

の時オーロラ A キナーゼの活性化の指標である T288 のリン酸化は免疫染色およびイムノブロットで減弱した。この一次線毛形成はオーロラ-A ノックダウンでも見られた。さらに、トリコプレインとオーロラ A キナーゼの直接結合を *in vitro* で確認し、*in vitro* キナーゼアッセイではトリコプレインがオーロラ A キナーゼを直接活性化することが明らかになった。トリコプレインの分子内解析としては、オーロラ A キナーゼ活性化かつ中心体局在・機能に必要な最小単位が、1-130 アミノ酸残基であることを確認した。特に 52 番目のアラニンと 54 番目のトリプトファンがオーロラ A キナーゼの活性化に重要であった。以上のことから、中心体でトリコプレインがオーロラ A キナーゼを活性化すると一次線毛形成が抑制されると考えられる。

#### 1-2 一次線毛形成抑制と細胞周期制御との関与

細胞周期進行中は一次線毛形成が抑えられることは知られているが、そのメカニズムは今まで不明であった。トリコプレイン機能抑制は細胞周期の休止を起こしたが、一次線毛を除去した系ではそれが見られなくなった。このことは増殖マーカーすなわち Cyclin A の発現、BrdU の取り込み、FACS での S, G2/M 期の存在により確認した。つまり、トリコプレインは一次線毛形成を抑制することで円滑な G1 期細胞周期進行に寄与していると考えられる。まとめると、この成果の特徴はオーロラ A 分裂期キナーゼの活性化が実は G1 期の中心体でトリコプレインによって起こるといことと、もう一つは正常二倍体細胞でこの系を抑制す

ると一次線毛が形成され細胞周期進行が止まるという新発見にある。

#### 1-3 オーロラ A キナーゼ阻害によるがん細胞特異的傷害

がん細胞は一次線毛形成能を失っているということが知られている。同時にオーロラ A 分裂期キナーゼはがん細胞で要求性の高い酵素でもある。そこで、がん細胞である HeLa 細胞でオーロラ A をノックダウンしたところ、正常二倍体細胞のような一次線毛形成も細胞周期休止も起こらず、分裂障害により死滅した。

#### 2. 類似機能蛋白質の検索

中心体情報を元に出した遺伝子のノックダウンスクリーニングを RPE1 細胞で行うことにより、同様の蛋白質、すなわち増殖条件下でも一次線毛形成と細胞周期休止を導く蛋白質を新たに 10 個ほど見出した。

#### 3. 正常中皮モデル細胞の検索

悪性中皮腫の細胞株は研究代表者らにより確立されていたが、対照株として一次線毛形成能を持つ正常中皮を入手する必要があった。そこで論文報告を元に、遺伝子変異の無い正常中皮細胞として、LP9/TERT1 細胞を見出した。これは通常培養ではほとんど一次線毛を生じ長い、血清飢餓下に置いたところ過半数の細胞に一次線毛を形成することができた。

#### D. 考察

トリコプレイン・オーロラ A の中心体機能の解析により、一次線毛形成抑制による細胞周期制御仕組みが新たに示せた。G1 期に

おける一次線毛形成の負の制御がオーロラ A を介していることは、この報告も含め近年注目を増やしている。特に今回がん細胞に一次線毛形成能が無いことに着目し、オーロラ A 阻害によるがん細胞特異的傷害効果を狙った試みは画期的と言える。同時に、生体内での線毛制御はより複雑であることが想定されるが、類似機能蛋白質の同定によりその補強が可能となった。また、一次線毛形成の誘導可能な正常中皮のモデル細胞を得たことで、オーロラ A 阻害効果の中皮での応用検討が可能になった。

#### E. 結論

一次線毛形成能の差によるオーロラ A 阻害のがん細胞特異的傷害効果の中皮で検討する準備が整った。また、類似機能蛋白質の同定により標的分子の幅が広がった。

#### F. 研究発表

##### 1. 論文発表

1. Ohmuro-Matsuyama Y., Inagaki M., Ueda H. Detection of Protein Phosphorylation by Open-Sandwich Immunoassay. Integrative Proteomics. ed. Leung, H.-C.E. InTech, 197-214, 2012 (ISBN 978-953-51-0070-6)
2. Inoko A., Matsuyama M., Goto H., Ohmuro-Matsuyama Y., Hayashi Y., Enomoto M., Ibi M., Urano T., Yonemura S., Kiyono T., Izawa I., Inagaki M. Trichoplein and Aurora A block aberrant primary cilia assembly in proliferating cells. J Cell Biol, 197: 391-405, 2012
3. Li P., Goto H., Kasahara K., Matsuyama M., Wang Z., Yatabe Y., Kiyono T., Inagaki M. P90 RSK arranges Chk1 in the nucleus for monitoring of genomic integrity during cell proliferation. Mol Biol Cell, 23: 1582-92, 2012
4. Goto H., Izawa I., Li P., Inagaki M. Novel regulation of checkpoint kinase 1: Is checkpoint kinase 1 a good candidate for anti-cancer therapy? Cancer Sci. 103: 1195-200, 2012
5. Toda M., Kuo C.H., Borman S.K., Richardson R.M., Inoko A., Inagaki M., Collins A., Schneider K., Ono S.J. Evidence that formation of Vimentin/Mitogen-activated Protein Kinase (MAPK) complex mediates mast cell activation following Fc{epsilon}RI/CC chemokine receptor 1 cross-talk. J Biol Chem, 287: 24516-24, 2012
6. Jeong H.J., Ohmuro-Matsuyama Y., Ohashi H., Ohsawa F., Tatsu Y., Inagaki M., Ueda H. Detection of vimentin serine phosphorylation by multicolor Quenchbodies. Biosens Bioelectron, 40: 17-23, 2013
7. Goto H., Inoko A., Inagaki M. Cell cycle progression by the repression of primary cilia formation in proliferating cells. Cellular and Molecular Life Sciences. in press.
8. Kasahara K., Goto H., Izawa I., Kiyono T., Watanabe N., Elowe S., Nigg E.A., Inagaki M. PI

3-kinase-dependent phosphorylation of Plk1-Ser99 promotes its association with 14-3-3 $\gamma$  and is required for metaphase-anaphase transition. Nat Commun. in press.

## 2. 学会発表

1. Goto H., Li P., Kasahara K., Matsuyama M., Wang Z., Yatabe Y., Kiyono T., Inagaki M. P90 RSK arranges Chk1 in the nucleus for monitoring of genomic integrity during cell proliferation. 第45回日本発生生物学会・第64回日本細胞生物学会合同大会, 2012, (神戸), [ワークショップ]
2. Goto H., Li P., Kasahara K., Matsuyama M., Wang Z., Yatabe Y., Kiyono T., Inagaki M. P90 RSK arranges Chk1 in the nucleus for monitoring of genomic integrity during cell proliferation. 第45回日本発生生物学会・第64回日本細胞生物学会合同大会, 2012, (神戸), [ポスター]
3. Inoko A., Matsuyama M., Goto H., Ohmuro-Matsuyama Y., Hayashi Y., Enomoto M., Ibi M., Urano T., Yonemura S., Kiyono T., Izawa I., Inagaki M. Trichoplein and Aurora A block aberrant primary cilia assembly in proliferating cells. 第45回日本発生生物学会・第64回日本細胞生物学会合同大会, 2012, (神戸), [ポスター]
4. Kasahara K., Goto H., Izawa I., Watanabe N., Kiyono T., Inagaki M. PI3K-Akt pathway controls Polo-like kinase 1 (Plk1). 第45回日本発生生物

学会・第64回日本細胞生物学会合同大会, 2012, (神戸), [ワークショップ]

5. Kasahara K., Goto H., Izawa I., Watanabe N., Kiyono T., Inagaki M. PI3K-Akt pathway controls Polo-like kinase 1 (Plk1). 第45回日本発生生物学会・第64回日本細胞生物学会合同大会, 2012, (神戸), [ポスター]
6. Tanaka H., Matsuyama M., Inoko A., Kondo E., Kobori K., Hayashi Y., Itohara S., Izawa I., Inagaki M. Disorder of cytokinesis by defect of mitotic vimentin phosphorylation results in chromosomal instability. The 12th biennial Gordon Conference on Intermediate Filaments, 2012, (Lewiston, ME), [ワークショップ]
7. Tanaka H., Matsuyama M., Inoko A., Kondo E., Kobori K., Hayashi Y., Itohara S., Izawa I., Inagaki M. Disorder of cytokinesis by defect of mitotic vimentin phosphorylation results in chromosomal instability. The 12th biennial Gordon Conference on Intermediate Filaments, 2012, (Lewiston, ME), [ポスター]
8. Inoko A., Matsuyama M., Goto H., Ohmuro-Matsuyama Y., Hayash Y., Enomoto M., Ibi M., Urano T., Yonemura S., Kiyono T., Izawa I., Inagaki M. Trichoplein and Aurora A block aberrant primary cilia assembly in proliferating cells. The 12th biennial Gordon Conference on Intermediate Filaments, 2012, (Lewiston, ME), [ポスター]

9. Izawa I., Hayashi Y., Inagaki M. LAP family protein Scribble interacts with Multidrug Resistance Protein 4 (MRP4/ABCC4). 第71回日本癌学会学術総会, 2012, (札幌), [ポスター]
  10. Kasahara K., Goto H., Izawa I., Watanabe N., Kiyono T., Inagaki M. The PI3K-Akt pathway controls mitotic progression through Plk1. 第71回日本癌学会学術総会, 2012, (札幌), [ポスター]
  11. Inagaki M. Intermediate filaments and site- and phosphorylation state-specific antibodies. Lecture at the University of Gothenburg, 2012, (Gothenburg), [招請講演]
  12. Kasahara K., Inagaki M. Novel mitotic signaling crosstalk between PI3K-Akt pathway and Plk1. Seminar for Center for Brain Repair and Rehabilitation, 2012, (Gothenburg), [セミナー]
  13. Inagaki M., Goto H. Novel regulation of checkpoint kinase 1 (Chk1): Is Chk1 a good candidate for anti-cancer therapy? Mini-Symposium on “Stress Signals & Responses”, Abo Akademi University Center of Excellence “Cell stress and Molecular Aging”, 2012, (Turku), [シンポジウム]
  14. Kasahara K., Inagaki M. Complex formation between Plk1 and 14-3-3 gamma is essential for metaphase to anaphase transition. Mini-Symposium on “Stress Signals & Responses”, Abo Akademi University Center of Excellence “Cell stress and Molecular Aging”, 2012, (Turku), [シンポジウム]
  15. Inagaki M. Pathophysiological roles of intermediate filaments and intermediate filament phosphorylation. Molecular concepts in epithelial differentiation, pathogenesis and repair. International Meeting of the German Society for Cell Biology, 2012, (Leipzig), [シンポジウム]
  16. Inagaki M. Intermediate filaments and site- and phosphorylation state-specific antibodies. Global COE the 4th International Symposium, 2012, (Nagoya), [シンポジウム]
  17. Tanaka H., Matsuyama M., Inoko A., Kondo E., Kobori K., Hayashi Y., Itohara S., Izawa I., Inagaki M. Disorder of cytokinesis by defect of mitotic vimentin phosphorylation results in chromosomal instability. Global COE the 4th International Symposium, 2012, (Nagoya), [ポスター]
  18. Goto H., Kasahara K., Izawa I., Kiyono T., Watanabe N., Elowe S., Nigg E. A., Inagaki M. Novel mitotic signalling crosstalk between PI3K-Akt pathway and Plk1. the 52nd Annual Meeting of the American Society for Cell Biology, 2012, (San Francisco), [ポスター]
- G. 知的財産権の出願・登録状況  
なし。

正常中皮細胞に対する遺伝子導入による悪性化の検討

研究分担者 瀬戸加大 愛知県がんセンター研究所 副所長兼遺伝子医療研究部 部長

研究要旨：悪性中皮腫の発症機構として様々なゲノム異常が報告されており、その中でも NF2、LATS2、YAP1 遺伝子異常によるシグナル伝達系が悪性中皮腫の腫瘍化に主要な役割を担っていることが証明されてきた。これらは主として患者検体と細胞株を用いて明らかにされてきたが、悪性中皮腫に認められるゲノム異常は個々の患者検体により様々に異なっていることを我々はこれまでのアレイ CGH の解析により明らかにしてきた。しかしこれまでに見出された遺伝子異常が悪性中皮腫にどのように関わっているのかについての実証実験はない。このためこれらの中皮腫の増殖、腫瘍化に重要と思われる遺伝子を不死化正常中皮細胞へ導入し増殖能の変化や形態変化、腫瘍化能を検討することは、正常中皮細胞から悪性中皮腫へと形質転換する分子機構をより明瞭化することができる可能性を示唆する。今回、当研究グループが作成してきたヒトパピローマウイルス E6/E7-hTERT により不死化した正常中皮細胞株 3 株に代表的な中皮腫がん関連遺伝子 YAP1 を導入することで *in vitro* にて増殖促進効果が認められることを確認した。さらに YAP1 遺伝子を導入した正常中皮細胞株をヌードマウスへ移植した結果、*in vivo* においても腫瘍を形成できることを確認した。このことは特定の遺伝子導入により悪性中皮腫モデルを作成できたことを意味し、治療実験や他の遺伝子導入による効果などの検定のための基盤とすることができる。

A. 研究目的

ヒトパピローマウイルス E6/E7-hTERT により不死化した正常中皮細胞株に悪性中皮腫関連がん遺伝子を導入し、増殖様式や形態変化を検討する。さらにマウスへの移植実験により造腫瘍性を検討する。これらにより悪性中皮腫の腫瘍化に関わる分子機構を解明するとともに、治療標的分子の探索の基盤とすることを目的とする。

B. 研究方法

これまでに当研究グループが作成してきたヒトパピローマウイルス E6/E7-hTERT により不死化した正常中皮細胞株に悪性中皮腫関連がん遺伝子を導入し、増殖様式や形態変化を検討する。また、マウスでの造腫瘍性を検討する。

1. *In vitro* 増殖様式の検討方法

リン酸カルシウム法を用いて 293T を標的として、悪性中皮腫関連がん遺伝子である野生型 YAP1 もしくは活性型 YAP1 (S127A) を組み込んだ

だプラスミドを用いてウイルス産生(レトロウイルスベクター)させ、標的細胞(正常中皮細胞株)へ感染させた。YAP1のレポーター遺伝子としてGFPを使用した。

感染させた標的細胞の細胞増殖の観察をCorning 6 well 細胞培養プレートを用いて培養した。4日毎に継代し、継代時にFACSを行いGFP陽性細胞の割合を40日間継時的に調べた。

## 2. ノードマウスへの移植方法

上記と同様の方法にて野生型 YAP1 もしくは活性型 YAP1 (S127A) を導入した不死化正常中皮細胞を  $7.5 \times 10^6 \sim 1.0 \times 10^7$  個/1 か所まで増やし、ノードマウスへ接種。対照群としてレポーター遺伝子であるGFPのみを導入した (Empty vector) 正常中皮細胞を接種した。

皮下接種の場合、1匹につき Empty vector 導入正常中皮細胞を左背側の2か所に接種し、野生型 YAP1 もしくは活性型 YAP1 (S127A) 導入正常中皮細胞を右背側の2か所に接種(1匹につき4か所接種)。胸腔内へは1匹につき1か所ずつ、Empty vector・野生型 YAP1・活性型 YAP1 (S127A) 導入正常中皮細胞を接種した。

### (倫理面への配慮)

本研究は愛知県がんセンターのヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理審査委員会の承認を得ている。動物実験は愛知県がんセンター動物委員会の許可を得た上でやっている。

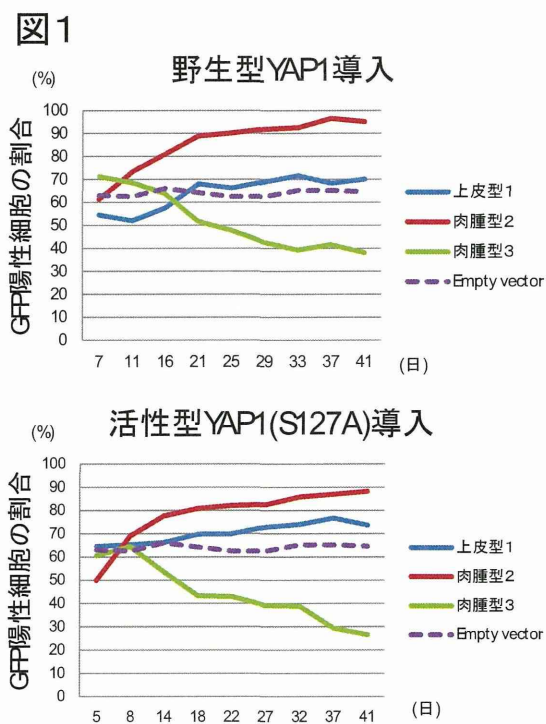
## C. 研究結果

同一個体から由来する不死化正常中皮細胞株をクローニングすることにより形態の

異なる細胞株をこれまで樹立してきた。それらは、形態学的に上皮型 (HOMC-2 A-7 B-1) (以後: 上皮型 1) と、肉腫型① (HOMC-2 A-7 D-4) (以後: 肉腫型 2)、と肉腫型② (HOMC-3 A-4) (以後: 肉腫型 3) に分けられる。まず、上皮型 1、肉腫型 2、肉腫型 3 を対象に、野生型 YAP1 あるいは活性型 YAP1 (S127A) 遺伝子を導入し、細胞増殖能における役割を検討した。その結果、

1) *in vitro* での増殖効果を検討したところ 上皮型 1 では増殖促進効果は明確に認められなかったものの、肉腫型 2 では明確に増殖促進効果が認められた。一方、肉腫型 3 では、遺伝子導入のない元の細胞株と比較し増殖能の低下が認められた。

(図 1)

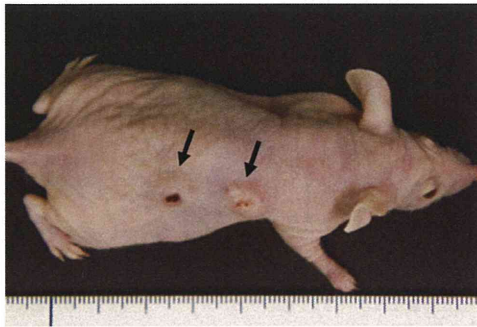


2) 遺伝子導入のない元の細胞株もしくはレポーター遺伝子 GFP のみ導入した細胞株ではノードマウスへの皮下接種にて腫瘍は作らなかったものの、活性型

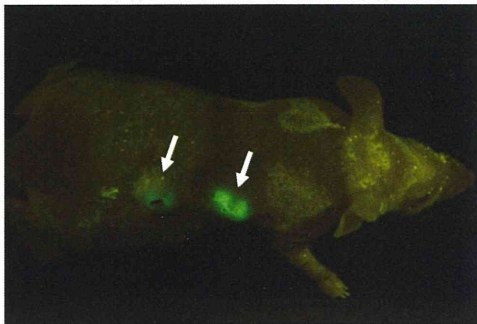
YAP1 (S127A) を導入した上皮型 1、肉腫型 2 ともに腫瘍を形成した(図 2)。

図2

肉腫型2 –活性型YAP1( S127A)



ヌードマウス



GFP蛍光像

また野生型 YAP1 導入の細胞株においても腫瘍形成を認めている(表 1)

表1. ヌードマウスへの腫瘍形成

野生型YAP1導入の細胞株を移植

系統	皮下腫瘍(%)	胸腔内腫瘍(%)
上皮型1	1/4(25%)	—
肉腫型2	4/4(100%)	—
肉腫型3	4/4(100%)	—

活性型YAP1(S127A)導入の細胞株を移植

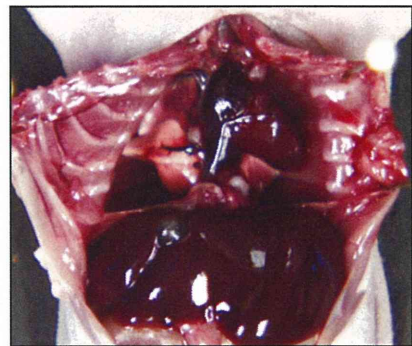
系統	皮下腫瘍(%)	胸腔内腫瘍(%)
上皮型1	6/8(75%)	2/2(100%)
肉腫型2	6/8(75%)	2/2(100%)
肉腫型3	8/8(100%)	2/2(100%)

7.5-10x10<sup>6</sup>個の細胞を皮下や胸腔内へ接種。接種後30日目に腫瘍形成を判定。

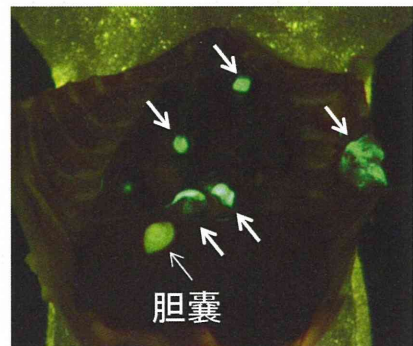
3) 活性型 YAP1 (S127A) を導入した上皮型 1、肉腫型 2、肉腫型 3 を胸腔内接種にていづれの細胞株でも胸腔内に腫瘍形成を認めた(図 3 : 太い矢印)

図3

肉腫型3 –活性型YAP1(S127A)



ヌードマウス(胸腔)



GFP蛍光像

D. 考察

1) E6/E7-hTERT により不死化した正常中皮腫細胞株を用いて悪性中皮腫に關与する主要なシグナル伝達系の構成遺伝子である YAP1 を導入することで、in vitro での増殖促進効果が認められ、ヌードマウスで腫瘍を形成したことは、正常中皮細胞から中皮腫を作成できたことを意味する。すなわち、特定の遺伝子導入による悪性中皮腫モデルを作成できたことを意



味し、治療実験や他の遺伝子導入による効果などの検定のための基盤ができた。

- 2) 上皮型1では *in vitro* で増殖促進効果が低く、肉腫型3では増殖能の低下が認められたにもかかわらず、ヌードマウスで腫瘍を形成した。おそらく、*in vivo* での腫瘍を取り巻く微小環境が造腫瘍性にかかわっている可能性が示唆される。

今後の方向性：

- 1) 正常中皮細胞を腫瘍化することに成功した。野生型 YAP1 遺伝子と活性型 YAP1(S127A) 遺伝子を導入した上皮型1と肉腫型2は *in vitro* にて増殖傾向を示しているが、肉腫型3は増殖能の低下が見られた。この違いについて検討していく。YAP1 と TEAD4 が複合体を形成すると細胞増殖を誘導するが、YAP1 と p73 の複合体はアポトーシスを誘導する。遺伝子導入した細胞株で p73 や TEAD4 の発現をウエスタンブロット法で発現量を調べ、必要があれば免疫沈降を行う。また内因性 YAP1 と外因性 YAP1 の分布を、免疫染色を行うことで明確にする。遺伝子導入をしていない細胞株と遺伝子導入後の細胞株を比較する(核に多く認められるのか、もしくは細胞質に多く存在するのか)。
- 2) 肉腫型3においては *in vitro* と *in vivo* において増殖能では対照的な結果が得られた。腫瘍化における YAP1 遺伝子の役割を確認する上で、遺伝子導入していない正常中皮細胞と YAP1 遺伝子導入の正常中皮細胞との間における発現解析だけでなく、*in vitro* での細胞と *in vivo* にお

いて形成した腫瘍を発現解析で比較することで悪性の因子を明確化する。

- 3) 今後 YAP1 以外の腫瘍関連遺伝子について、今回用いた実験系で評価できるかを検討する。具体的には悪性中皮腫細胞株の発現解析で発現上昇が強く認められた (CCND1, FOXM1 など) についても、造腫瘍能について検討を始める。
- 4) 今回の研究成果で得られた正常中皮細胞から樹立した悪性腫瘍細胞株は治療実験や腫瘍化の発症機構解明の良い実験モデルとして用いていく。

#### E. 結論

- 1) 正常中皮細胞を E6/E7-hTERT を用いて不死化した細胞をクローニングすることにより形態の異なる3種類の不死化正常中皮細胞株3株 上皮型 (HOMC-2 A-7 B-1) と肉腫型① (HOMC-2 A-7 D-4) と肉腫型② (HOMC-3 A-4) を樹立した。
- 2) *in vitro* において上皮型 (HOMC-2 A-7 B-1) は野生型 YAP1 もしくは活性型 YAP1(S127A) 遺伝子導入による細胞増殖効果は認めなかったが、肉腫型① (HOMC-2 A-7 D-4) は明らかな増殖促進効果が認められた。一方、肉腫型② (HOMC-3 A-4) は増殖能の低下を認めた。
- 3) 上皮型 (HOMC-2 A-7 B-1)、肉腫型① (HOMC-2 A-7 D-4)、肉腫型② (HOMC-3 A-4) のいずれでもヌードマウスにおいて腫瘍を形成した。マウスでの微小環境が増殖を支えていると考えられる。
- 4) 今後 YAP1 以外の腫瘍関連遺伝子についても評価可能であることが示唆される実験系を確立できた。

## F. 研究発表

### 1.論文発表

1. Kato H, Yamamoto K, Oki Y, Ine S, Taji H, Chihara D, Kagami Y, Seto M, Morishima Y.: Clinical value of flow cytometric immunophenotypic analysis for minimal residual disease detection in autologous stem-cell products of follicular and mantle cell lymphomas. *Leukemia*, 26: 166-9, 2012.
2. Chihara D, Matsuo K, Kanda J, Hosono S, Ito H, Nakamura S, Seto M, Morishima Y, Tajima K, Tanaka H.: Inverse association between soy intake and non-Hodgkin lymphoma risk among women: a case-control study in Japan. *Ann Oncol*, 23: 1061-6, 2012.
3. Liu F, Karube K, Kato H, Arita K, Yoshida N, Yamamoto K, Tsuzuki S, Kim W, Ko Y-H, Seto M.: Mutation analysis of NF- $\kappa$ B signal pathway-related genes in ocular MALT lymphoma. *Int J Clin Exp Pathol*, 5: 436-41, 2012.
4. Yoshida N, Umino A, Liu F, Arita K, Karube K, Tsuzuki S, Ohshima K, Seto M.: Identification of multiple subclones in peripheral T-cell lymphoma, not otherwise specified with genomic aberrations. *Cancer Medicine*, 1: 289-94, 2012.
5. Liu F, Yoshida N, Suguro M, Kato H, Karube K, Arita K, Yamamoto K, Tsuzuki S, Ohshima K, Seto M.: Clonal heterogeneity of mantle cell lymphoma revealed by array comparative genomic hybridization. *The European Journal of Haematology*, 90: 51-58, 2012.
6. Inoue T, Matsuura K, Yoshimoto T, Nguyen LT, Tsukamoto Y, Nakada C, Hijiya N, Narimatsu T, Nomura T, Sato F, Nagashima Y, Kashima K, Hatakeyama S, Ohyama C, Numakura K, Habuchi T, Nakagawa M, Seto M, Mimata H, Moriyama M.: Genomic profiling of renal cell carcinoma in patients with end-stage renal disease. *Cancer Sci*, 103:569-76, 2012.
7. Tsuzuki S, Seto M.: Expansion of functionally defined mouse hematopoietic stem and progenitor cells by a short isoform of RUNX1/AML1. *Blood*, 119: 727-35, 2012.
8. Karube K, Tsuzuki S, Yoshida N, Arita K, Liu F, Kondo E, Ko YH, Ohshima K, Nakamura S, Kinoshita T, Seto M.: Lineage-specific growth inhibition of NK cell lines by FOXO3 in association with Akt activation status. *Exp Hematol*, 40: 1005-15, 2012.
9. Tsuzuki S, Seto M.: TEL (ETV6)-AML1 (RUNX1) initiates self-renewing fetal pro-B cells in association with a transcriptional program shared with embryonic stem cells in mice. *Stem Cells*, 31: 236-47. 2013.
10. Umino A, Seto M.: Array CGH reveals clonal evolution of adult T-cell leukemia/lymphoma. *Methods Mol Biol*,

- 973: 189-96. 2013.
11. Yoshioka S, Tsukamoto Y, Hijiya N, Nakada C, Uchida T, Matsuura K, Takeuchi I, Seto M, Kawano K, Moriyama M.: Genomic profiling of oral squamous cell carcinoma by array-based comparative genomic hybridization. PLoS One, 8: e56165. 2013.
  12. Seto M.: Cyclin D1-negative mantle cell lymphoma. Blood, 121: 1249-50. 2013.
  13. Karube K, Tsuzuki S, Yoshida N, Arita K, Kato H, Katayama M, Ko Y-H, Ohshima K, Nakamura S, Kinoshita T, Seto M.: Comprehensive gene expression profiles of NK cell neoplasms identify vorinostat as an effective drug candidate. Cancer Letter, 2013 in press
  14. Yoshida N, Nishikori M, Izumi T, Imaizumi Y, Sawayama Y, Niino D, Tashima M, Hoshi S, Ohshima K, Shimoyama M, Seto M, Tsukasaki K.: Primary peripheral T-cell lymphoma, not otherwise specified of the thyroid with autoimmune thyroiditis. Br J Haematol. 161:214-23, 2013
  15. Taguchi O, Tsujimura K, Kontani K, Harada Y, Nomura S, Ikeda H, Morita A, Sugiura H, Hayashi N, Yatabe Y, Seto M, Tatematsu M, Takahashi T, Fukushima A.: Behavior of Bone Marrow-Derived Cells Following in Vivo Transplantation: Differentiation into Stromal Cells with Roles in Organ Maintenance. Am J Pathol. 2013 in press.
2. 学会発表
1. 瀬戸 加大: Genomic alterations in malignant lymphoma and its implication in cancer treatment. The 38th Annual Meeting of Korean Cancer Association. 招請口演. 2012, (COEX Seoul, Korea)
  2. 吉田 稚明, 海野 啓, Liu Fang, 在田幸太郎, 加留部謙之輔, 都築 忍, 大島 孝一, 瀬戸 加大: ゲノム異常陽性PTCL, NOSにおけるサブクロンの存在. 第52回日本リンパ網内系学会総会, 2012, (福島) [口演]
  3. 吉田 稚明, 海野 啓, Liu Fang, 在田幸太郎, 加留部謙之輔, 都築 忍, 大島 孝一, 瀬戸 加大: ゲノム異常陽性PTCL, NOSにおけるサブクロンの存在. 第52回日本リンパ網内系学会総会, 2012, (福島) [ポスター (示説)]
  4. 瀬戸 加大: NK 細胞性腫瘍の機能特異的がん抑制遺伝子としてのFOXO3. 第16回日本がん分子標的治療学会学術集会, 2012, (北九州市) [ワークショップ]
  5. 岸本 渉, 錦織 桃子, 田嶋 政治, 山本 玲, 坂井 智美, 都築 忍, 瀬戸 加大, 高折 晃史: マントル細胞リンパ腫のマウスモデルの作製. 第71回日本癌学会学術総会, 2012, (札幌) [ポスター (示説)]
  6. 加留部 謙之輔, 都築 忍, 中村 栄男, 瀬戸 加大: NK 細胞性腫瘍に特異的ながん抑制遺伝子であるFOXO3. 第71回日本癌学会学術総会, 2012, (札幌) [ポスター (示説)]
  7. 都築 忍, 瀬戸 加大: CML-BCにおけるAML1/RUNX1 変異とBCR-ABLの協調作用. 第71回日本癌学会学術総会, 2012, (札幌) [ポスター (示説)]

8. 吉田 稚明, 海野 啓, 劉 芳, 在田 幸太郎, 加留部 謙之輔, 都築 忍, 大島 孝一, 瀬戸 加大: ゲノム異常陽性の末梢性 T 細胞性リンパ腫、非特異型におけるサブクローンの存在. 第 71 回日本癌学会学術総会, 2012, (札幌) [口演]
9. 加留部 謙之輔, 大島 孝一, 瀬戸 加大: 悪性リンパ腫の臨床病理および分子病態の解析. 第 71 回日本癌学会学術総会, 2012, (札幌) [口演]
10. 都築 忍, 瀬戸 加大: Expansion of mouse hematopoietic stem/progenitor cells by a short isoform of RUNX1/AML1. 第 74 回日本血液学会総会, 2012, (京都) [ポスター (示説)]
11. 瀬戸 加大: Molecular characterization of T/NK cell malignancies Masao Seto. 第 74 回日本血液学会総会, 2012, (京都) [シンポジウム(口演)]
12. Noriaki Yoshida, Akira Umino, Fang Liu, MD, Kotaro Arita, Kennosuke Karube, MD, Shinobu Tsuzuki, Koichi Ohshima, and Masao Seto. : Identification of Multiple Subclones in Peripheral T-Cell Lymphoma, Not Otherwise Specified with Genomic Aberrations. 第 54 回米国血液学会総会, 2012, アトランタ(米国) [口演]
13. Kotaro Arita and Masao Seto. : New mouse models of B-cell lymphoma using in vitro retroviral transduction system. 第 9 回日本癌学会・AACR 合同会議, 2013, ラハイナ(米国) [ポスター]

G. 知的財産権の出願・登録状況

なし。